

プロセス
生成へと到る旅路：哲学と心理学の〈あいだ〉の
人類学者ティム・インゴルド

佐古仁志*

要 約

本稿では、心理学と哲学の〈あいだ〉でなされてきたインゴルドの思索の変遷を、彼の「移動」にまつわる研究に注目し、展開する。特に、インゴルドが西洋近代思想の特徴と主張している「反転の論理」の要点が「〔存在するものの〕知覚」と「〔存在しないものの〕想像」の区別・対立にあること指摘する。そのうえで、「反転の論理」を反転させようとするインゴルドの試みが、たえず生まれては消えながら波を形成する波頭のように、生きることをたえざる世界との調整あるいは世界の形成に見る生成の人類学とも呼ぶべきものであること、さらには、パースの連続主義と結びつけることで、身体性認知科学の方へと展開しようということを提示する。

キーワード：生成、移動、反転の論理、連続主義、身体性認知科学

はじめに

本稿の目的は、心理学と哲学の〈あいだ〉でなされてきたインゴルドの思索の変遷を、インゴルドによる「経路探索 (wayfinding)」と「ナビゲーション (navigation)」の区別に代表される「移動 (movement)」研究に注目することで展開することにある。

特に、インゴルドが西洋近代思想の特徴と主張している「反転の論理 (logic of inversion)」との関係で、インゴルドの思索がギブソン (メルロ＝ポンティ)、ハイデガー、ドゥルーズ、そして心理学 (身体性認知科学) をめぐってどのように変遷したのかを概略し、そのポイントが「〔存在するものの〕知覚 (perception)」と「〔存在しないものの〕想像 (imagination)」の区別・対立にあること指摘する。

それから、かならずしも明示的ではないが、インゴルドによるこの二項対立の克服としての生 (life) と線 (line) に関わる生成 (becoming) の人類学、つまりは、たえず生まれては消えながら波を形成する波頭のように、生きることをたえざる世界との調整あるいは世界の形成に見る立場を確認する。

最後に、インゴルドを参照しながら身体性認知科学の方へと研究を展開しているマラフォーリスを経由して、マラフォーリスが参照しているパースの連続主義、特に「アブダクション」とインゴルドの思索の関係について論じる。特に、パースが「アブダクション」という推論のもとに、「知覚」と「想像」とを対立させることなく連続的な過程として見なしていたという点に注目することで、学習の場面へのインゴルドの思索の展開を試み、インゴルドの思索が、より緊密に身体性認知科学と連携し、展開していくための道筋を提案する。

2019年11月30日受付

* 江戸川大学 基礎・教養教育センター非常勤講師 哲学、心理学

1. 「反転の論理」を反転するインゴルド

インゴルド (Ingold 2015a) は人類学の三つの原理として①ほかの動物とともに私たち人間は、根本的に開かれている世界の生き物であるということ②人類学は「文化」対「自然」という形ではなく、あらゆる角度からの人間の研究であるということ③記述を目的とするエスノグラフィーを越えて進む必要があるということを提示し、人類学には心理学 (認知科学) が必要であると主張する。

ここではインゴルドが西洋近代思想の特徴と名指している「反転の論理」を確認したうえで、その論理を再度反転するために、インゴルドがどのように心理学と哲学の〈あいだ〉を旅してきたのか、さらにどこへと旅をしようとしているのかを確認する。

1.1. 「反転の論理」と反転されているもの

「反転 (inverse)」⁽¹⁾ という言葉は、インゴルドがその語を使用している最初期の論文 (Ingold 1993) において翻訳との関係で、次のように述べられている：「関係の連鎖の内部におけるノードとしてのヒトを、それらを構築するための認知規則の集合を担うものとして代置することを私は反転と呼ぶ」 (Ingold 1993 : 218-219)。

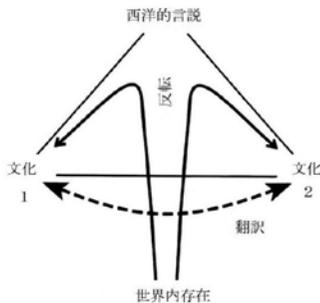


図1 西洋近代思想における反転 (Ingold 1993 : 219)

また、インゴルド自身が明確に述べているわけではないが、本稿で後ほど確認するように、この「反転の論理」を反転すること (あるいは別の論

理へと展開すること) がインゴルドの著作群を通じた一貫したテーマである。

ではそもそもこの論理により何が反転されているのか具体的に見ることにしよう。一つめは、存在とその裏面としての環境である⁽²⁾。「本来世界へと開かれている存在は、周囲との相互作用のやりとりから内部構成を守る外部の殻や境界で封をされ、自らに取り囲まれる」 (Ingold 2011: 68) と述べているように、本来開かれている有機体は内部へと境界づけられることによって、その外部としての環境を引き立てることとなる。つまり、本来有機体とともにある環境が、その間に仕切りをされることで、有機体は「こちら」にあり、環境は「向こう」にあることとなる (Ibid. 69)。ここでは反転の論理により、外側のものが内側へと反転されているといえる。



図2 外側の内側への反転 (Ingold 2011: 69)

二つめは、運動の優位性 (the primacy of movement) (アニミズム) である。アニミズム的存在論では有機体は世界の肌理を構成する織りに貢献するものとして住みつく運動〔生成 (becoming)〕であるのに対し、世界を占拠する静止したもの〔存在 (being)〕へと反転させられる (Ibid. 72-73)。つまりは、運動が静止へと反転されている。

三つめが、天候〔媒質・あいだ〕である。西洋の多くの理論において、「地面は大地と大気境界面としてだけでなく、ずっと根本的な仕方ではエージェンシーと物質性の境界面として姿を現わす」 (Ibid. 73)。つまり、地球の表面は、具体的なもの〔物理的世界としての大地〕と想像のもの

〔思考へと昇華される空〕との境界面となるが、奇妙なことに、まさに媒質に関わる実在の現象や変容といったものための概念空間、「天候」のための余地は残されていない（「媒質」の「境界面」への、「あいだ」の「線」への反転）。

インゴルドは、以上のように「反転」されたものを、再度「反転」することにより、世界の見方に再度の変革を迫る。そしてそのことは次に見るように、ギブソンやハイデガー、ドゥルーズの思想を経由することで、展開されることになる。

1. 2. 再「反転」の試みの変遷

インゴルド (Ingold 1993, 219-222) は、「反転の論理」に基づく西洋的知覚理論の大部分が、内部を想定しそれから知覚が行われると考える点を間接知覚論として批判し、ギブソンの生態心理学（直接知覚論）に親近感を抱いていた。しかし、2000年を過ぎたあたりから、「環境」について考えるなかで、生態心理学の抱える問題点を指摘し、メルロ＝ポンティやユクスキュルを経由しながら、ハイデガー、ドゥルーズ、そしてその先（身体性認知科学）へとその思索的基盤を変更している。

ここでは、インゴルド自身の記述 (Ingold 2011: ch.6) を参照しながら、インゴルドにとって、特にギブソンとハイデガーの何が問題であったのかを検討しつつ、ドゥルーズへといたった経緯を考察する。

1. 2. 1. ギブソン

インゴルドが、意味が頭のなかで構成されると考える認知主義（間接知覚論）にたいし、「知覚が、……まさに使用過程での意味を発見する」(Ibid. 78) というギブソンの直接知覚論に共感を覚えたのは、そのような環境の意味としてのアフォーダンスが東になることで、ニッチとして動物の世界が環境となると考える点にあった。

他方でギブソンによる「物理的世界」と「動物の環境」との明瞭な区分に対して、「環境についての関係論的見方と古くからある慣習的見方とを和解させることができなかつた」(Ibid. 78) ため

に、矛盾を抱えていると指摘し距離を置くようになる。

その矛盾とは、ギブソンはアフォーダンスが環境に実在すると述べることで、結局のところ主観／客観という二分法に依拠することになっているということである。インゴルドは、その矛盾の源泉を「環境が対象を備えた世界を構成するという想定」(Ibid. 78) に見ている。それはアフォーダンスの東としてのニッチという考え方に象徴されるように、結局のところ環境の側が優位に立つこととなり、環境に対して閉じられる（ニッチに部分的に封入される）ことになるからである。

1. 2. 2. ハイデガー

続いてインゴルドは、ユクスキュルの環世界論を経由しつつ⁽³⁾、ハイデガーの哲学へと導かれる。インゴルドがハイデガーの思索のなかで注目したのは、「環世界のなかにいる動物は環境に開かれているかもしれないが、世界には閉じられている」(Ibid. 81) という点であり、開かれの世界に住みついているのはただ人間だけであるという点である⁽⁴⁾。

ハイデガーは動物がある囲みの輪に「とらわれている」と主張する。ただし、この囲みの輪は梱包するものではなく、状況に応じて欲望を解放する、ある種の鍵束の役割を果たすものである。しかし、動物はそのことをまったく知らず、そのため事物に事物として出会うことに失敗する。それに対し人間が事物に事物として出会うことができるのは、世界が開かれているということを知っているからである。インゴルドは、このように閉じられていた世界が「開かれる」という点をハイデガーの思索のポイントとして取り出している。

他方で、インゴルドによればこのような態度はギブソンとは逆の問題を抱えることとなる (Ibid. 82)。それは、ギブソンが述べているように、何もない空のもとで地平線まで伸びる完全に平坦な砂漠のような開けた環境には何ものも住むことができないため、ハイデガーにおいては、世界は開拓という形式で部分的に封鎖解除されることによってのみ住みつくことが可能になるということ

である。

1. 2. 3. ドゥルーズ、そしてその先としての 身体性認知

これら両極である二つの立場の間で、インゴルドは第三の道として、ハイデガーが称賛し、優先しているものを反転すること——「とらわれ」の祝福——を提案する。それは周囲のあらゆる境界からこぼれる生命の開放性である。「それは成長や運動の余地を残すものであれば、どんな裂け目や亀裂であろうとも通り抜け、根茎の根や匍匐枝のような仕方で縫うように進むものであ」(Ibid. 83)り、フランスの哲学者ドゥルーズの筋で進むことである。

ドゥルーズにおいて、生は境界線の内部ではなく、線——逃走線、生成変化の線——に沿って生きられる。そのような線は、点と点とをつなぐのではなく、点と点とのあいだをすりぬけ、その中間でのみ芽吹くものであり、始まりも終わりもなく中間があるに過ぎない線である。そして、「環境」はこのような線の絡み合いとして現れることになる。

インゴルドはこのように「生成変化の線」とその絡まり合いの「メッシュワーク」⁽⁵⁾というアイデアをドゥルーズから得ているが、他方でドゥルーズは滑らかな空間〔メッシュワーク〕を線や運動からなるものとして描き出していないと指摘する (Ingold 2015b, 82)。そこで、メルロ＝ポンティ (の現象学) へと、そして再度ギブソンへと戻ることで、アンディ・クラークやマクシーヌ・シーツ＝ジョンストンなど (身体性認知科学) へと到ることになる (Ibid. part.2)。

次の節では、このような「反転の論理」を反転するためのインゴルドの旅路が具体的にどのようなものかを理解するために、インゴルド自身が行っている「移動」研究を参照する。

2. インゴルドにおける「移動」研究の変遷

まずはインゴルドにおける「移動」研究に焦点を当てる理由の説明から始める。それは「反転の

論理」についての検討でも確認したように、インゴルドの研究の中心に「運動 (movement)」があるという点と、思索の変遷に応じて「移動」研究に変化がみられる、あるいはこれからの変化が期待できるという点にある。

2. 1. 「経路探索」と「ナビゲーション」

インゴルドは、明示的に述べているわけではないが、「経路探索 (wayfinding)」と「ナビゲーション (navigation)」という二つの移動形式の違いに注目することで、第一の反転の論理 (外から内への反転) と第二の反転の論理 (動くものから動かないものへの反転) の再反転を試みている (Ingold 2000)。また、そこにはギブソンとその裏返しとしてのハイデガーの影響を見ることができる。

まずは、「経路探索」と「ナビゲーション」とがどのように対比されるかを見ることから始めよう。一般に「ナビゲーション」とは、ひとがなじみのない土地で地図を使用して目的地に到達するために行なっていることであり、「経路探索」とはある程度その土地になじみのある人が、地図を使うことなく目的地に到達する仕方とされている。これらの研究で指摘されることが多いのは (Portugali 1996)、両方の事例において、実のところ「地図」が利用されているというものである。つまり、前者が紙の地図を利用しているのに対し、後者は、頭の中にあるとされる「認知地図」を利用しているという考えである。

インゴルドが生態心理学などに依拠しながらその初期の移動研究において批判をしているのは、「認知地図」という考え方であり、そもそも一人称的な視点 (目線) から独立した三人称的な視点 (上空) から描かれているとされる「地図 (表象)」の批判にある。

一つめのインゴルドの批判のポイントは、「認知地図」という形で地形が表象として内化されるという点 (反転) である。もうひとつはいわゆる鳥瞰図としての「地図」がそもそも「空間 (space)」という形で文化・社会的にフィルターがかかったものである点、つまりは、「地図」は

地形そのものの写しではなく、方向や距離などにゆがみがある想像の産物だという点である。このような「地図」が移動の基盤をなしているという考えに対して、インゴルドは静止したところから見るというアイデアが根本的に間違っていると指摘する (Ingold 2000, 226)。つまり、ここに動くものの動かないものへの反転を見ている。

それに対してインゴルドが提案するのが、空中への垂直 (vertical) 移動による俯瞰としてではなく、水平 (lateral) 移動する眺望 (ノード) のつながりとしての「領域 (region)」⁽⁶⁾ (ネットワーク) というタイプの「地図」であり、点 (静止) から線 (動き) への反転である。

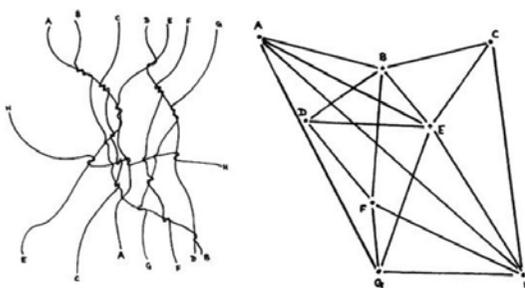


図3 メッシュワークとネットワーク (Ingold 2007: 82)

とはいえ、先のギブソンとハイデガーへの言及にあったように、実際のところこの段階では内と外という二分法は解決されていないし、あとで見るように静止から動きへの再反転も不十分ということを考えれば、ここでなされているのは反転 (inverse) ではなく、裏と表のひっくり返し (reverse) であり、その意味で問題は解決されていない。

2.2. 「徒歩旅行」と「輸送」

インゴルドは「経路探索」と「ナビゲーション」という区別を引き受けたいうえで、次に「徒歩旅行」と「輸送」の区別、さらには「徒歩旅行」の優先を提案し、第二の反転の論理と第三の反転の論理 (あいだの線への反転) の再反転を試みている (Ingold 2007, 2010)。

「徒歩旅行」とは、イヌイトの旅のように、最

終目的地を持たず、絶えず動いている状態にあるものである。ある飲食店に行こうとするといったようにさしあたりの目的地はあるものの、混雑などの理由で、動いているさなかに別の飲食店へと目的地が変わるものであり、またそこから別の目的地 (仕事場) などへと引き継がれ一本の線を形成する。徒歩旅行者は、そのような線に沿って進む道すがら、環境とさまざまな交渉を行ない、それらに即興で対応し、そのような行為と共に成長する。

徒歩旅行で重要な点は、継続されるのはプロセスであり、何らかの産物ではないということである。私たちがそこで引き継ぐものは、頭のなかに詰め込まれた表象・心的内容の蓄積物ではなく、環境にある手がかりへの感受性を豊かにし、判断のために利用できるようにする資質、つまりは環境と切り結ぶための即興の資質である。そこにおける静止は、何か達成された状態ではなく、動きが一時的に停止されているに過ぎない緊張の状態である。

それに対し、「輸送」とは、目的地指向の移動であり、「徒歩旅行」のように生活に沿って成長することではなく、ある位置から別の位置へ横断して人や物資をその基本的性質が変化することのないように運搬する移動様式である。

また、「輸送」においては「徒歩旅行者」とは異なり、すべての目的地は終着点であり、緊張ではなく成功の瞬間をしるす点であり、輸送される旅人は乗客として、自分では動かず、場所から場所へと受動的に動かされる存在である。その間の風景や音といった環境の変化はあまりに早すぎて、彼らは切り結ぶことはできない。「輸送」において重要であるのは、旅が与えてくれる経験ではなく、目的地に広がる風景を目撃することである。

これら二つの移動の区別は、機械的手段を使用するか否かではなく、徒歩旅行において見られる移動と知覚との親密なつながりが消失しているかどうかによってなされる。まとめるならば、徒歩旅行とは始点も終点もない道の途中で、常にどこかの場所にいる。しかし、すべての「どこか」

は、別のどこかへ行く途中であり、住まわれた世界とはそのような徒歩旅行者たちの線によって、絶えることなく複雑に編まれたメッシュワークとなる。

他方で、輸送は特定の場所に結びつくものである。すべての移動は場所から場所へと特定の目的地に人や財産を移すためのものであり、点と点を連結するネットワークを形成するものである。

ここにインゴルドにおけるギブソン（ハイデガー）からドゥルーズへの「移動」を見ることができ。「経路探索」においてインゴルドは「領域」ということで眺望（ノード）からなるネットワークを考えていたが、ある種の混同があったとしてメッシュワークへと変えているのである（Ingold 2011: 250.ch.13n3）。つまり、決まった点と点をつなぐ移動から、むしろ移動する中でさまざまな点が生まれると考えるようになったのである。

また、プロセスとそこにおける旅行者の成長という点に「媒質」への再反転を、ネットワークのように点から点への移動でなく、メッシュワークのように移動のなかで点が生じるところに「動くもの」への（ひっくり返しとは異なる）再反転を見ることができる。

このようにドゥルーズを経ることで、「ひっくり返し（reverse）」ではない「反転（inverse）」へと到ったことで、インゴルドは先の問題（内と外の反転）へと戻ることができるようになったと考えられるのではないか。それは、「エージェンシー」概念とのかかわりで哲学者マクシーヌ・シーツ＝ジョンストンやアンディ・クラークなど身体性認知科学との関連を示唆する点や、メルロ＝ポンティを伴いながらではあるがあらためてギブソン（アフォーダンス）に言及するようになった点（Ingold 2015b）にその兆しを見ることができる。

次の節では、インゴルドがまさにやっているさらなる展開と、それとともにあるものとして、移動研究ではないが、身体性認知科学者のマラフォーリスの研究をとりあげる。

3. 身体性認知科学の方へ： アブダクションとしての知覚

インゴルドは以上のような旅路を経て、再度、生態心理学（アフォーダンス）へと戻ってきている（Ingold 2018）。そこでは生態心理学における矛盾とインゴルドが考える関係的特性と実在性の問題をあらためて指摘しつつも、先に見たようにユクスキュル⁽⁷⁾をその補完物と考えることで展開をしている。それは想像をある種の解釈や知覚への気づきとしてではなく、知覚と連続的にとらえることで、知覚を私たちの世界とのかかわりを揺らいだ時そのかかわりを回復するもの〔閉じるもの〕として、他方、想像をそのようなかかわりを緩めるものとしてとらえる。そして、あらゆる生命はそのような締め付けと緩めの交代にあると考え、世界に住まうこととはこのような世界の自己制作、あるいはオートポイエーシスのプロセスにあることだと主張し、身体性認知科学の方へと進むことを提案する（Ibid. 43）。

ここで少し注意しておきたいのは、以前に指摘したことがあるのだが（佐古 2008）、アフォーダンスをエージェントの存在にかかわらず環境に実在する特性として考える立場はエドワード・リードに特有の立場であり、多くの生態心理学者はむしろアフォーダンスを関係的特性（環境の特性としてのアフォーダンスとエージェントの特性であるエフェクティビティの結びつくところに行為が生じる）と考えているという点である。その点でインゴルドの批判が直接、生態心理学全般への批判となるかは少し注意が必要である。

とはいえ、インゴルドは身体性認知科学の方向への示唆は行っているが、具体的に思索を展開しているわけではない。ここでは、マラフォーリス（Malafouris 2019）が、インゴルドによる「反転の論理」を参照しながら、さらに、パースの心と物質とを連続的に考える連続主義を採用しつつ身体性認知科学へ向けて展開するように、このようなインゴルドの旅路を継ぐものとして、パースが述べている知覚と想像の連続性（アブダクション）について検討する。

パースは「知覚判断はアブダクティブな推論の極端な事例と見なされる」(CP.5.181)⁽⁸⁾ とする一方で、「私が今まで言ってきたことは、外的世界に関する直接、あるいは無媒介の、知覚の教理の正しさを含意する」(CP.5.539) と述べている。この一見、矛盾した立場にあるように思われる知覚論は、しかし、ハーク (Haack 1994) が主張するようにパースの「批判的常識主義 (critical common-sensism)」を参照することで、統一的な理論として、知覚と想像 (推論) とを連続したものとしてとらえる知覚論 (直接知覚と間接知覚を統合した知覚論) として考えることができる。その知覚論の詳細の検討は別の機会に譲ることにして、ここでインゴルドの思索との関連でとらえておきたいのは、知覚とは、ある意味で暫定的な仮説にすぎず、それは常に、さらなる精査による改訂の可能性を秘めているという考え方である⁽⁹⁾。

以前に検討したパースのアブダクション (佐古 2016) との関係でもう少し述べておこなれば、パースにおける信念を確定する (何かの意味を獲得する) という探究の過程は、驚きや違和感により開始され、そのような驚きや違和感を解決するように仮説が提示 (アブダクション) される。そして、それが現実の世界で検証されることにより、正しい仮説であるかどうか判断され、異論が出てこない限り小休止する。このような探究の過程こそが、すでに確認したインゴルド自身が想像について述べている所 (閉じられつつあるなかでの開く働きとしての想像) から明らかなように、インゴルドが考えている知覚と想像の連続性の内実であると言えるだろう。

おわりに：生成の人類学への展望

最後にこのようなインゴルドの思索が、特に広い意味での学習の研究に役立つということについて三つの事例を見ることで本稿を終えることにする。

a. 子どもによる博物館の「意味」の学習

一つめは子供の学習の場面である。ハケット (Hackett 2015) は、インゴルドの「徒歩旅行」という移動形式に依拠しつつ、まだ博物館を訪れたことのなかった2歳から3歳になる子どもを、親と共に繰り返し博物館に連れていくことで、子どもたちがどのような知識を獲得するのかという研究を行っている。

その研究で明らかになったことは、子どもたちが博物館のなかをいろいろと動き回り、親や博物館のなかで出会ったほかの子どもたちと一緒にになり、博物館におけるさまざまな場所の「意味」を発見するとともに、そのような発見に基づき場所の「意味」を制作するという過程が連鎖しているということである。

子どもたちは、博物館に行くたびに館内を移動するという (人を含む) さまざまなものとのやりとりのなかで、固定した知識 (意味) ではなく、例えば置いてあった太鼓を利用して行進を始めるといったような、その状況に応じた「意味」を獲得する。

また、この研究結果がインゴルドの身体性認知科学へと向かう旅路において示唆的であるのは、認知意味論者で身体性認知科学の源流の一人とされるジョンソン (Johnson 1988, 171) が、想像についての議論のなかで重視している物語構造、つまりは、人間の理解における「物語の統一」という考え方を提示している点である。博物館における子供たちの学習においては、「物語」が形成されては壊されることで「意味」が獲得されており、まさに「生成」の物語 (旅路) の中で学習が行われていると言える。

b. 都市におけるアウトリーチ活動

二つめは福祉ワーカーの移動についての研究である。ホールら (Hall et al. 2014) は、カーディフという都市において福祉ワーカーが、屋外で移動しながら生活している自分のクライアントとなる人物たちと会うためにどのように移動するのかということを研究している。そしてそのような研究を分析する手段として、身体性認知科学を参

照しつつ、インゴルドによる「徒歩旅行」という移動形式を利用している。

従来の研究の多くはそのようなクライアントと出会った地点をプロットするという手法を用いた分析であった。それに対し、ホールらは実際に福祉ワーカーたちが自分のクライアントたちに出会うための移動が「徒歩旅行」という移動形式であったことに注目する。その結果として、そのような福祉ワーカーたちの巡回は、どの巡回も決して同じものではなく、その福祉ワーカーたちの動きの線がまさにその場所の知識そのものを表わすものとなっていることを明らかにした。

以上二つの研究は、「徒歩旅行」という移動形式が、子どもにおいては、「博物館」の知識の物語を通じた身体化を促すものとして、福祉ワーカーの場合には、「徒歩旅行的」巡回こそが、彼らの仕事を支える実践的な知識として、まさに身体化（学習）されている事例といえるだろう。

このような知識の獲得は、「伝達」されるのではない仕方で獲得、学習される方法を提示しているとともに、まさにこのような移動に伴う知識の獲得、学習こそが、さらなる移動を導くという形で、私たち自身を、つまりは〈自己〉の形成に大きな役割を果たしていることを示唆するものである。

c. 場所細胞

三つめは以上で確認した二つの研究と少し毛色の違う、近年の脳科学で注目されている「場所細胞」である。この細胞は、脳の海馬部で発見されたのだが、特定の場所を通過するときに発火することからその名がつけられ、いまや認知地図の脳内基盤をなすものとして研究されている（松本ら2013）。

しかし、ここまで見てきたインゴルドによる移動研究を踏まえるならば、それはいわゆる「認知地図」というよりむしろ、インゴルドの提唱する意味での「地図」の基盤をなしていると考えるのが適切だろう。というのも、「場所細胞」はもちろんこの世のすべての空間を覆っているわけではなく、人間（動物）の動きとともに、更新あるい

は再構成されるものだからである。また、その細胞が発見された場所が海馬というエピソード記憶（物語）と特に関係がある場所であることを考えるならば、インゴルドの主張は一層の説得力を持つ。

以上のように、インゴルドの思索が、「反転の論理」の反転、さらにはその一つの応用としての移動研究を通じて、身体性認知科学へと展開されるということを示すことができたのではないか。特に、「反転の論理」の反転を通じた「知覚」と「想像」の連続性にもとづく思索の展開は、パースにおける連続性思想（アブダクション）や身体性認知科学、さらには広い意味での学習研究と結びつくことで、生成の思想へと到るさらなる旅路を歩むこととなるだろう。

《注》

- (1) インゴルドは特に触れていないが、invrseは、論理学では「裏」と訳されるものであり、PならばQに対する、 $\neg P$ ならば $\neg Q$ （PでないならばQではない）という関係を指すもので、その真理値はかならずしも維持されない。
- (2) インゴルド（Ingold 2011: ch.5）は反転されているものとして、存在、環境、運動の優位性、天候、驚嘆の五つとりあげているが、ここでは内容的連関から三つにまとめている。またさらなる検討が必要ではあるが、あとで見るように、インゴルドへのドゥルーズの影響などを考慮すると、反転の論理は変化している。
- (3) インゴルドは過去の著作（Ingold 2000）では、ギブソンの生態心理学の発展的な乗り越えのために、メルロ＝ポンティの哲学に注目しているが、ここ（Ingold 2011: 79）ではギブソンの生態心理学の背景に、ユクスキュルの環世界論が隠されていると指摘している。メルロ＝ポンティがほとんど言及されていないとはいえ、ユクスキュルからハイデガーへと到る旅路には、もちろんメルロ＝ポンティの思索があると考えられる。
- (4) またここでは触れていないがハイデガーの「住みつくこと（dwelling）」という点に、すでに建てられた（built）住居に住むのではなく、住みながら住居をつくり続けるという点を重視している（Ibid. 9-12）。
- (5) 「メッシュワーク」という言葉は、ドゥルーズによるものではなく、アンリ・ルフェーブルから借用されている（Ingold 2011, 84）。
- (6) インゴルドは、垂直と水平の対比ならびに「領域（region）」という語を、エドワード・ケーシー

- から借用している (Ingold 2000, 227)。
- (7) インゴルドはここではなぜかユクスキュルの系譜を継ぐものとしてハイデガーではなく、生命記号論をあげている (Ingold 2018, 41)。
- (8) 慣例に習い, Collected Papers of Charles Sanders Peirce. Vol. I ~ VIII, Harvard University Press, 1934-1958. の巻数とパラグラフ・ナンバーであらわしている。
- (9) この考え方は、染谷 (2017) が生態心理学における知覚論について述べていること (知覚は誤らない) の別の言い方といえるかもしれない。ある意味で一回一回の知覚自体に誤りはない。しかし、それぞれの知覚はさらなる精査による改訂の可能性を含んでいる点において、知覚はある意味で仮説 (想像の産物) なのである。

参考文献

- Haack, S. (1994). How the Critical Common-Sense Sees Things. *Histoire Épistémologie Langage*, 16 (1): 9-34.
- Hackett A. (2015). Young Children as Wayfarers: Learning about Place by Moving Through It. *Children and Society* 30 (3): 169-179.
- Ingold, T. (1993). The art of translation in a continuous world. In *Beyond Boundaries: Understanding, Translation, and Anthropological Discourse*, Gísli Pálsson (ed.), pp. 210-230. Providence: Berg.
- Ingold, T. (2000). *The perception of the environment: essays on livelihood, dwelling and skill*. London: Routledge.
- Ingold, T. (2007). *Lines: A Brief History*. London: Routledge.
- Ingold, T. (2010). Footprints through the weather-world: Walking, breathing, knowing. *Journal of the Royal Anthropological Institute*, 16 (1), S121-S139.
- Ingold, T. (2011). *Being Alive: Essays on Movement*. Routledge.
- Ingold, T. (2013). Making, Growing, Learning. Two Lectures presented at UFMG, Belo Horizonte, October 2011. *Educação em Revista*, 29 (3), pp. 297-324.
- Ingold, T. (2015a). Human cognition is intrinsically social, developmental and historical. *Social Anthropology* 23 (2), pp. 188-191
- Ingold, T. (2015b). *The Life of Lines*. London: Routledge.
- Ingold, T. (2018). Back to the future with the theory of affordances. *Hau: Journal of Ethnographic Theory*, 8 (1/2), pp. 39-44.
- Johnson, M. (1987). The body in the mind: the bodily basis of meaning, imagination, and reason. Chicago: Chicago University Press. (菅野盾樹・中村雅之 (訳) (一九九一) 『心のなかの身体』紀伊国屋書店)
- Malafouris, L. (2019). Mind and material engagement. *Phenomenology and the Cognitive Sciences* 18 (1), pp. 1-17.
- 松本信圭, 坂口哲也, 池谷裕二 (2013). 「海馬回路演算の機能と意義 — 基礎から最新の知見まで」『心理学評論』, 第 56 卷 2 号, pp. 157-185.
- Portugali, J (ed.). (1996). *The Construction of Cognitive Maps*. Dordrecht: Kluwer.
- 佐古仁志 (2008). 「アフォーダンスの構造 — 生態記号論に向けて」, 『年報人間科学』, 大阪大学人間科学部社会学・人間学・人類学研究室, 第 29 号 (1), pp. 133-148.
- 佐古仁志 (2016). 「意味」を獲得する方法としてのアブダクション：予期と驚きの視点から」『叢書セミオトポス⑩ ハイブリッド・リーディング』, 新曜社, pp. 239-254.
- 染谷昌義 (2017). 『知覚経験の生態学』, 勁草書房。

